史林
第十五卷 第一號 (通卷第五十七號) 昭和五年一月發行

研究

支那古銅器研究に對する一考察

梅原末治

一

支那の古銅器の調査研究は、從來それを藏した遺跡の學術的調査の行はれなかつた結果として、考古學上必要な伴出物や存在狀態に關して何等の徵證がなく、爲に研究の困難を示す點に於いては固より自餘の支那古代の遺物の例に漏れないものであるが、これに加ふるに本類にあつては、其の上に表はされた文字の偏重から來る支那人一流の傳統的解釋や、器自體が本來宗廟の重器であるから古式の傳承が永く行はれたものであるとする見解の傳播に依つて、一層其の困難の度を强めてゐる。此の後者のうち銘文に關する點はしばらく除外するとして、右の古式の繼承の肯定から導かるゝものは時代に依る型式變遷の觀察を不可能にす

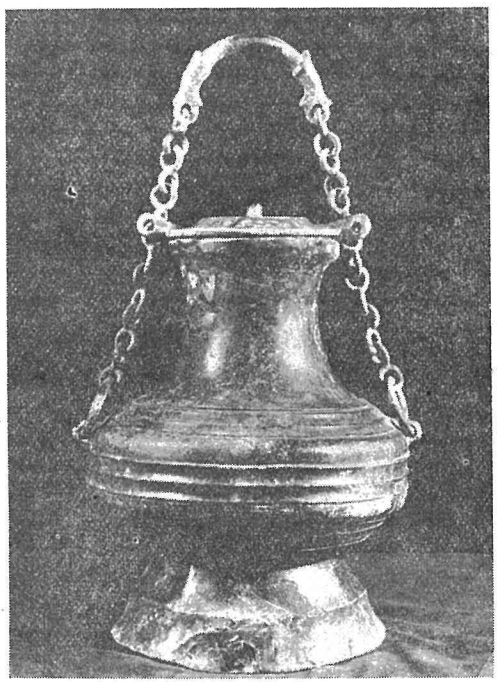
るものであつて、考古學上の研究に最も重要な形式學的考察の遂行に多大の枝梧を生ぜしむる事に外ならぬ。この事は殆んど自餘の國土に類例のない特殊の形態を備へた支那の古銅器に對する比較觀察からする考究方法の出來難い事實と相俟つて今や遺物としてそれをば科學的に考察することを殆んど不可能ならしめる結果を齎してゐる。現在多くの人士の間に行はれてゐる支那古銅器の觀察が主として觀者の氣分に左右せられ、また其の常識的判斷に基いてゐるのは主として如上の所以に依るのであつて、近年續出する關係の著書が其の浩瀚なるにもかゝはらず研究上の何等の基準を示さない理由もまた自ら解し得るのである。

支那の古銅器發見遺跡の實狀の調査出來ない事は學術的見地からして非常な恨事であることは云ふを要しないが、支那の現狀から見れば、それを將來に俟つ外はあるまい。さり乍ら如上のうち古式の繼承と云ふ事から來る形式學的研究に對する枝障に對しては、それが前者と違つて本來一個の見解——勿論それは非常に有力なものとして內外學者の依據するものではあるが——なるに於いて果してしかく信ずべきものなりや否やを其の本に遡つて反省して見ることが、吾々の如く新しく支那の古銅器の研究に從事する者にとつて、他面あらゆる機會をとらへて古銅器出土の遺跡の調査研究を行ふと同樣に緊要なことであると信ずるのである。幸にも支那古銅器のうち漢代に屬するものが十數年來朝鮮、印度支那、蒙古等の各地で學者の手で發掘されることになつて、なほ不充分乍ら新しい基礎の上に右の點を考究する可能性が與へられる事になつた。で以下少しく此の問題を考へて見ることにした。

二

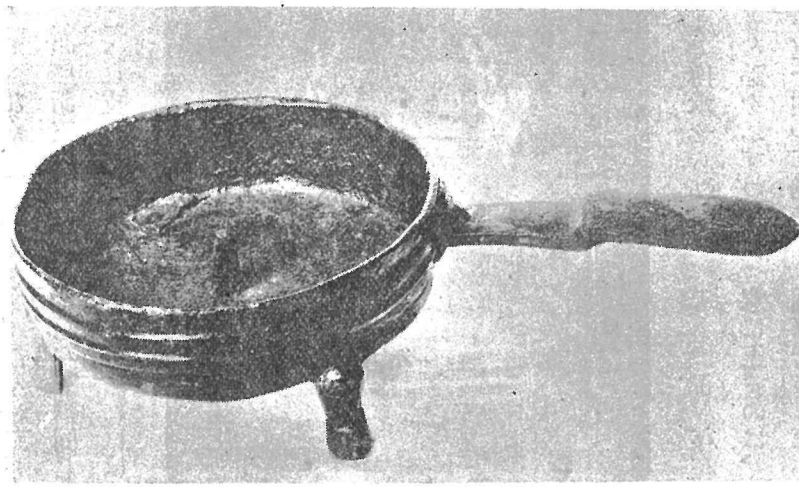
さて綜括して支那の古銅器と云ふが、其の中で

重要な位置を占めるものは云ふまでもなく、漢及其の以前の遺品であつて、支那人の所謂三代の古銅器が其の最たるものとして、こゝに支那古銅器の特色が示されて居るのであり、銅器の研究が主なる對象をこれに置いて、漢六朝の遺品に及んでゐるのは顯著な事實なのである。從つて實際に於いては上段に記した見解を換言すると、特色の明な右の所謂三代の古銅器なるものが次の時期卽ち漢六朝まで傳承せられ製作せられたと云ふ事に一つの重要な點を示すわけなのである。いま此の見解の據る處を辿つて見やう。吾々が支那古銅器を見る際に先づ認めらるゝ顯著な點は同じ形式の多いと云ふ事實である。是等のうちにはほゞ同じ銅質を示してゐる上に、器を飾つた文樣や銘文等が全く同じ手法で表はされてゐて同時の製作と推定し得る類（例へば夔龍饕餮紋壺と命名された特別な形の銅器が住友男爵（泉屋清賞第五十一圖）家と華府のフリヤ美術館との兩者に遺存するが如き是れである）もともより存在するのではあるが、それと共に注意に上るのは、其の上に印せられた文樣や銘文が同じでありながら、表現の手法に違つた段階を示



第一圖　印度支那發見銅器（巴里ヲニヤツク氏藏）

し、また器の銅質に可なり著しい――固より外觀上ではあるが――相違の認めらるゝものゝ並び存することである。これは住友男爵所藏の銅器の目錄卽ち「泉屋淸賞」を通觀するとほゞ分明するが、更にそれを英國のビクトリア及アルバート博物館に藏する多數の支那古銅器と比較することに依つて最も明瞭な印象が與へられる。是等のうちから僞物の製作に巧みな支那人の模古の銅器を除外するも、なほ右の現象があらゆる器形に於いて示されるのである。此の場合支那の學者は文字を重んずるところから、其の銘辭の體に基き簡單に殷周及漢と年代を區別して、文樣其他の示す事實を殆んど度外視するか、考古學的研究の行はれてゐる國土では、當然其の全般に亙る合理的の解釋が要求せられるのであつて、かくて導き出されたのが如上の古形式の傳承と云ふ見解なのである。而して此の見解を支持する處のものは、漢民族が本來古を尙び先王の道を重んずると云ふ其の國民性に對する觀念であつて、それから祖先を祭る宗廟の重器として製作した尊彝が古式を繼承したと云ふ推測



第二圖　北蒙古ノインウラ古墳發見銅器（レニングラードー物質文化學院藏）

が合理化されるのである。で右の見解が廣く行はるゝ事は一應理由づけられるのであつて、かりにこゝに一個の古式の銅器が表はれたとすると、器が嚴正な文樣の配列を取つてゐれば三代少くも周代とし　古い銘辭があつても表現法が整齊を缺くと漢代と見る說――甚だしきに至つては唐代とする說が行はれ、かゝる個々の資料の集積の上に現在の支那古銅器觀が成立つてゐるわけである處が其の結果として示される形なり文樣は、時代に依る特徵や、變遷なるものが殆んど捕促し難くなり終つた類であること、嚮に第一冊を出した英國ユウモルフオプロス翁の銅器玉器の圖錄に於けるエツツ氏の解說並にバーリントン誌六月號所載のラウファー博士の同書に對する批評等の上に最も適切にそれが表はれてゐる。

第三圖　所謂秦銅器の一例（巴里ヴニヤツク氏藏）

私は如上の見解が與へられた事象に對する一の有力なる解釋法であることを認むる者であるが、これは初にも一言した如く考古學的研究に最も必要な形式學的の考察に對する支障を生ぜしめるものであるから、それとは別にかゝる場合に加へ得る他の解釋の可能如何を一應考慮して見ること、並に實物の上から果して右の解釋が認められるや否やを確める資料の檢出に意を用ふることにした。處が先づ前者に對して

は少くも二つの見解を加へる事が出來る樣である其の一は古代銅器の作られた地方が必ずしも一局部に限る理由が存しない以上、鑄造の地方地方によつて、巧稚精粗の存在が容認せられやうから、これを以て示された現象を解くことであるし、其の二は宋代に勃興した尙古思想が古器の愛玩と相表裏して同代に古器の複製が大いに行はれ次代に及んだと云ふ歷史事實から、所謂古器のうちに此の類の存在する事を認める事に依る解釋法である而して此の後者は古鏡鑑の場合に於いては、其の示す銅質と、時に加へられた複製品の上の作者の附加銘とから、可なりハツキリと複製品を本來の器から區別し得る樣である。而して現存鏡鑑に案外此の種の複製漢鏡の多い點を考へると、彝器の場合も然るものではないかと思はれる。で右の鏡鑑の間に認められる手法上の相違點の觀察は同時にそれが彝器の上に存在すれば當然知られるわけであつて、こゝに二者峻別の可能性が認められる事になる。私は兩三年來此の方面の觀察に從事した結果、これに第一に擧げた製作の際に生ずる地方的差違の存在に對する考慮を加へると、一見解し難い古銅器に見ゆる各段の類例形の多い問題の解決を、此の全く新しい方面に見出し得る樣に考へる樣になつた。けれども此の事は究局に於いてはそうであらうとも、直ちに廣く行はるゝ從來の見解の不當を意味するものにはならない。こゝに於いて果して古き式がしかく支那に於いて繼承せられたかを遺物の上から吟味する事が重要な意義を持つのである。

三

いま是れを遺物の上から觀察する場合、吾々の利用し得る資料は其の性質の上から二つに分れる。一つは宋代以來の金石學關係の著錄に載する遺品であつて、他は現在實物を存して親しく吾々の調

査し得る類である。此の後者に十數年來、支那の四隣の國土で學者の調査の結果見出された遺物を含んでゐる。處が二者のうちで前者は本來銘辭を主としたものであるから、器形文樣などの傳寫に於いて甚だ正確を闕くものが多い上に、銘文の釋讀のみを專らにして銅質其他に對する記載のない類であるから、本論の如き根本に觸れた問題に對して資料たるに適せず、單に參考資料たるにとゞまるに過ぎないが、後者は其の點からは確かさを持つものであるから、據り得る資料とす可く、特に學者の發掘に係る伴出物の明な遺品は、よしそれが現在支那內地に實例を求め得ずまた數に於いて圖錄所載の如く多數ならざるの憾を存するとも資料として最も重要な位置を占むるものとなるのである。從來世に出た此の種の銅器は南滿洲をはじめ、朝鮮、蒙古、印度支那等に於いて日、露、佛の學者の行つた學術發掘の收獲物並にそれに關連したものであつて、時代は殆んど漢代に局限せられ、僅に一部分、例へば南鮮の古新羅古墳の出土品に六朝代のものを見ると云ふ程度であるが、その漢代の遺品を主とする點が問題となつてゐる支那古銅器形式の傳承如何に關する考古學的考察に最も必要な要件をみたして吳れる。何となれば上にも記した如く、此の問題は換言すると其の根底に所謂殷周器の漢代傳承如何と云ふことが主要なる部分をなしてゐるからである。でいまこれに出土地の不詳な支那本土から齎された遺品を併せ考へ、また圖錄を參考して論をすゝめることにする。

然らば是等の資料から今日認められてゐる漢銅器の特色は如何、これの詳細は他日別に論證するの機會に讓ることにするが、銘のある漆器の伴出に依つて營造年代の漢盛時にありとせられた朝鮮平安南道大同江面第九號墳に副葬せられてゐた多

數の銅器が如實に物語り、また自餘の出土品がそれを支持してゐる如く、其の器は著しく薄手となつて、先秦代銅器に見るが如きグロテスクな重苦しい氣分を脱し、寫實的な感じを與へる點が著しいのであるし表面裝飾では饕餮、虺龍等の奇怪な文樣が概ね其の迹を絶ち、僅かに器の環座の獸面に其の名殘をとゞむるに過ぎず、一般に無文であるが、時にこれあるものは波狀文と一部人士の呼ぶリフアインされたものを持つ點にまた其の特色の一つが見られる。第一圖は印度支那發見に係りいま巴里のワニヤツク氏の所藏する提擧のある鍾形銅器、また第二圖は外蒙古ノインウラ山地古墳發見の燈形銅器である。圖の示す處から共に右の漢代の特色を備へてゐることが容易に看取されやう。

漢代銅器の先秦銅器に對して持つ上記の如き特色は、支那の學者もそれに似た歸結を早くから持つてゐたことが、銘文の示す處に基き配列した多くの金石關係の圖錄の記載から推し得るのであつて、一般に支那學者が周と漢との器を峻別してゐることは近く「燕京學報」に載せた容庚氏の「殷周禮樂器考略」「漢代服御略考略」などに依つても知られる。尤も現在先秦形式の漢傳承說を主張する學者と云へども、漢代に既記の形式の存在したに就いては疑を挿んでゐるものとは思はれない。從つてこゝに殘る點は實物上、かゝる漢の特色のある器の以外に前者の傳承を主張し得る程の多くの古式器が漢代に存するや否やに係るのである。此の場合吾々の有する確實なる資料のなほ僅少なことが論述を不充分ならしめるものなのを繰返さゞるを得ないのを憾とするが、他面朝鮮樂浪の遺跡の如きは盜掘を加へると無慮三百餘の古墳が掘開せられて多數の銅器を顯現したが、現在に於いては一の古式銅器をもそのうちに見出さないのであ

るし、割合に廣い範圍に亘つて調査せられた南滿洲に於ける漢代遺跡發見の銅器の示すところ、また同樣であると共に、それが同じ地域から出る明器の形の上にも反映してゐる點は考古學上重要な事實と稱すべきである。更に從來調べられた蒙古朝鮮、印度支那と全くかけ離れた地域に於ける漢代の遺跡から出る銅器が一樣に同じ特徵を示して古形式の殘留を見出さない事實の上に、上述の特色を持つ銅器が時代を風靡して、如何にそれがすみ〳〵にまで波及したかを察せしむるものがあるとせなければならぬ。されば現在吾々の持つ資料からは漢代に於ける古形式の銅器の製作の盛であつたのを認むるのは難いことゝなる。轉じてこれを他の方面卽ち銘文の示す事實から考察するも吾々に遺された資料からは漢代の銘を持つ先秦の確實な器を見出し得ないのである。論述の確さを保つ爲にしばらく實例を、私の實見した遺物卽ち上記の後者の資料に限るとしやう。先づ漢の樂浪郡の遺跡から出た永光三年の孝文廟の銅鍾が明に所謂漢器の特色を具備したものであるのをはじめ、京都藤井善助氏所藏長沙元年造る處の某廟の鈁、兵庫縣御影の嘉納治兵衞氏所藏する王莽始建國元年正月の鳳文斗、獨逸伯林の國立博物館東洋部新收の神爵元年造長安下領宮の雁足燈、さてはミュンヘンのハニエル氏所藏の永始二年有銘の銅鼎の如き孰れも漢代特有の器形を示してゐる事が認められる。此の點は宋以來の金石圖錄類所載の同じ銘を持つ多數の遺物に於いても全く同一であつて、また前者の事實を强むる傍證とならう。而して上に擧げたうちに宗廟の器なる銘辭の明な遺品もなほ新形式なることが特筆に値してこゝに從來唱へられた漢代に古形式を傳承した器の多いと見る重要な論據が事實の上から壞される外ないことになるのである。

四

以上の記述から現在吾々の持つ資料の範圍に於いて、漢代に古式銅器の製作が引續いて盛行したと認むることの難いのが不充分ながら明になし得たと思ふ。從つて茲に支那古銅器の形式學的研究の可能が認められるわけであり、また同時に第二項に說いた考察の推究から種々の段階にある資料の整理が行はるべきことにならう。是等の事は更に所謂三代銅器並に漢器の持つ特色を、現在西歐に於いて學者の興味を惹きつゝある所謂秦銅器なるものゝ持つ性質と對比することに依つて、なほその環境の明にせられるものがある樣に考へられる。所謂秦銅器に就いてはいま詳記することを得ないが此の名稱を負ふた銅器の一群が一九二四年に歸化城の北方に於いて見出されて、佛のワニャック氏に依り巴里に齎され、忽ち學者の注意上り、從來の埋もれた類品が世に出ると共に、新しい發見また相嗣ぐに至つた。さて秦器の特色として數へられる一つの著しい點は其の面に表はされた文樣であるが、これは一種の虺龍の卐狀に結びあつて連續した細密な圖樣が、一種の捺型を以て繰返して帶狀に配布せられ、その虺龍體に渦文樣の鮮かに表はれてゐる點と、他方鉛若しくば漆喰樣の白亞物質を以て施した象嵌而してそれは馴鹿をはじめ虎、馬、牛等の動物、禽鳥、魚類から狩獵、鬪爭などの光景に亘る一種の繪畫的のものを含み寫實的な特色のあるのが數へられてゐる。器形の方は小形の金具に於いてこそ特異な類を見るが大形容器にあつては例へば第三圖の鼎の如く、薄手になつて形の整美な點で漢器と共通の處があると共にまた其の脚の獸形の如き、周鼎のそれを思はせる點も存するのが注意せられる。大體からすると此の類の銅器の支那の北西方に出土の多いのは事實らしいが同じ特質は河南新鄭縣出土の銅器の

一部にもハッキリと表はれてゐて、分布が相當に廣く、時代の如きまた短い秦に限る可きものとも思はれない。現にワニャツク氏の齎し歸つた銅器を秦代と見る根據は頗る疑ふ可きものであるから、名稱の上に所謂なる二字を冠するの必要が痛感せられるわけである。そは兎も角として右の性質を通觀するの時、該銅器を從來の普通の區分である先秦漢兩者の仲間に置き得る可能性が實物の上から考へられると共に、特殊な文樣もNomadsの圖樣との比較に依つて兩者の連鎖が推定せられて、そこに支那の古銅器に於ける新形式發現の負ふところの外來文化の影響にあり、他方秦の興起、其の支那統一の文化的背景をこれと結びつけることの必ずしも不合理でないことにまで想倒せしめるのである。かゝる點から所謂秦銅器の出現は支那の古銅器の研究に向つて一の新生面を開くものであるが、同時にそれは周漢兩式の中間型たる性質を有し、而も廣き分布を持つとすれば、形式推移の一般論の上からして有力な中間に來る型式を度外視して、古形式の一形式を飛んだ後代にまで盛に行はれたとする見解の妥當でないのをも示す事になるわけである。

（此の小編は巴里に在りし日、瑞典のススワルド、シレン博士の問に答へて開陳した鄙見に若干の修補を加へたものである。昭和四年八月八日稿）